2011&12 JOI Report 8&9th

JOIプログラム第8期・第9期 コーディネーター 活動報告

2年間の任期を終えた第8期（2009年8月～2011年7月）、第9期（2010年8月～2012年7月）のコーディネーターから、それぞれの活動体験談を寄せていただきました。第1～7期の報告や今後の募集情報など、詳細はウェブサイトでご覧ください。

http://www.jpf.go.jp/cgp/fellow/joi/

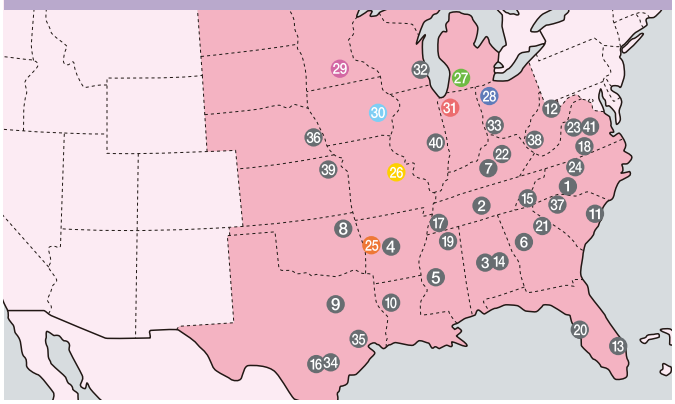
JOIプログラム　検索

		コーディネーター氏名	派遣先機関
1期	1	小阪田 佳子	サウスイースト・オリガミ／スミス・アカデミー
	2	倉辻 厚子	中部テネシー州立大学日米プログラム
	3	久田 かおり	アラバマ日米協会
2期	4	鈴木 丈夫	アーカンソー日米協会
	5	徳田 淳子	ミシシッピー・カレッジ
3期	6	高橋 祐子	ジョージア日米協会
	7	福原 くみこ	ケンタッキー日米協会
	8	横野 由起子	タルサ・グローバル・アライアンス／ オクラホマ東アジア教育インスティテュート
4期	9	安藤 良子	ダラス/フォートワース日米協会
	10	田中 美樹	南部多文化センター
	11	村田 有紀子	コスタル・カロライナ大学
5期	12	織田 美千子	ベサニー大学
	13	木谷 公子	森上ミュージアム
	14	小島 祥子	アラバマ日米協会
6期	15	西脇 笑子	ウェスタン・カロライナ大学
	16	増田 環	サンアントニオ日米協会
	17	松下 佐智子	メンフィス大学国際プログラム＆サービスセンター
	18	山崎 和子	ハリファックス公立学校区
	19	山田 悠花子	クロフト・インスティテュート・フォー・インターナショナル・スタディース
7期	20	荻島 光男	南フロリダ大学国際センター
	21	服部 聖	ジョージア大学アジア研究センター
	22	福崎 恵子	ケンタッキー大学アジアセンター
	23	鈴木 和子	バージニア大学東アジア言語文学文化学部
8期	24	青木 真子	ウェイク・フォレスト大学東アジア言語文化学部
	25	木幡 陽子	アーカンソー大学フォートスミス校
	26	森下 佳南	ウェブスター大学
	27	吉本 道子	ウェスタン・ミシガン大学曽我日本センター
	28	米倉 夏江	フィンドレー大学
9期	29	佐藤 嘉ン奈	ミネソタ日米協会
	30	日高 夢	アイオワ大学国際プログラム
	31	光林 瑠美	バルパライソ大学
	32	森 文彦	インターナショナル・インスティチュート・オブ・ウィスコンシン
10期	33	大野 麻未	グレーター・シンシナティ日米協会
	34	熊代 智恵	テキサス大学サンアントニオ校東アジア・インスティチュート
	35	鶴田 孝俊	ヒューストン日米協会
	36	星野 麻衣	ネブラスカ大学オマハ校国際プログラム
	37	松岡 愛美	ウォフォード・カレッジ
	38	山田 梓	マーシャル大学
11期	39	乗上 恵里香	カンザス大学ローレンス校東アジア研究センター
	40	蓮井 頼子	イリノイ大学東アジア・太平洋研究センター
	41	湯田 晴子	バージニア大学アジア・インスティチュート

JOIプログラムとは

日米草の根交流コーディネーター派遣（英名 Japan Outreach Initiative: JOI）プログラムは、米国の草の根レベルで日本への関心と理解を深めることを目的に、地域に根ざした交流を進めるためのコーディネーターを2年間派遣する事業です。活動を通して日本の草の根交流の担い手を育成するのも本プログラムのねらいです。コーディネーターは、日本との交流の機会が比較的少ない米国の南部・中西部地域の大学や日米協会をはじめとする地域交流活動の拠点に派遣され、その地域の小学校から大学までの教育機関、図書館、コミュニティセンターなどを訪れ、日本人の生活ぶりや、伝統芸能、日本語など、日本の幅広い文化を紹介する活動を行います。

これまでの派遣先一覧
アメリカ合衆国　派遣対象地域（南部・中西部）



JOIプログラムは、国際交流基金日米センターと米国の非営利団体ローラシアン協会が2002年度より共同で実施しています。

国際交流基金日米センター
The Japan Foundation Center for Global Partnership

日米が共同で世界に貢献し、緊密な日米関係を築くことを目的として、1991年に国際交流基金に設立されました。両国のパートナーシップ推進のための知的交流と両国の相互理解を深めるための地域・草の根交流の2分野で交流事業を行なっています。

TOKYO OFFICE
〒160-0004 東京都新宿区四谷4-4-1　TEL.03-5369-6072 FAX.03-5369-6042
http://www.jpf.go.jp/cgp/

ローラシアン協会
The Laurasian Institution

「異なる文化を背景とする人々が協力し、意義ある国際交流環境を創造していく」ことを基本理念に、1990年に米国イリノイ州に非営利法人として設立されました。日米両国に事務所を設置し、国際教育・異文化交流教育に主眼を置いたプログラムの企画・運営を行っています。主にアジア・アメリカ・ヨーロッパ大陸間で異文化理解を深めるための教育プログラムや情報の提供に関する事業を展開しています。

http://www.laurasian.org/joi/

本紙に関するご感想・ご意見をお寄せ下さい。　E-mail: cgpinfo@jpf.go.jp

©2012 独立行政法人 国際交流基金日米センター　無断転載、コピーを禁ず。掲載記事の内容は執筆者個人の意見であり、日米センターの意見を代弁するものではありません。

Arigato, Yoko-sensei!

第8期
(2009年8月～2011年7月)

木幡 陽子
Kowata Yoko

アーカンソー大学フォートスミス校
University of Arkansas at Fort Smith
(アーカンソー州フォートスミス)

大学時代にインドネシアの農村で有機農業技術普及のボランティアに参加。国際開発/教育に興味を持つ。大学卒業後はイギリスの大学院に留学、環境学を学ぶ。その後、国際環境NGO、日本企業での勤務を経て、JOIへの応募に至る。

ブルーのToyota Yarisとともに駆け抜けた私のJOIコーディネーターとしての2年間は、波乱万丈という言葉がぴったりと当てはまるような2年間でした。もともと日本でもペーパードライバーだった私がマニュアルのYarisを購入し、初めは危なっかしい運転をして何度も道に迷い、とても恐ろしい思いをしたことも多々ありました。そのような私が、2年後には一人で車を乗り回して活動できるようになりました。私の小さな青い車のたくさんの傷や窓ガラスのヒビはそんな波乱万丈の2年間の努力の象徴です。なかなか、自分を客観的に見て自分の成果を評価するというのは難しいですが、このような小さな変化もJOIというプログラムが私に与えてくれた成長の一つです。

▲ 図書館でのストーリータイム

私が2年間JOIコーディネーターとして活動した、ここフォートスミスは、意外と控えめでシャイな人が多いところです。もちろん子どもたちはというと、世界中どこでも同じ、元気で好奇心旺盛、教室を訪問すれば質問の嵐ですが、日本にも様々な人がいて、それぞれ違った文化があるように、アメリカも土地によって人も文化もこれほど違うものかと実感しました。そしてなんといってもアメリカ南部といえば、ホスピタリティー。都会にはない人との距離の近さ、コミュニティの絆の強さ、義理人情が根強く残っている地域です。その様な地域でのアウトリーチ活動は、接する人との距離が近く、とてもやりがいのあるものでした。コミュニティでお習字や日本語を教える機会に恵まれ、「Yoko-Sensei」と呼ばれたのも人生で初めてで、はじめは嬉しいような、照れくさいような気持ちでした。しかし、活動を続けていくうちに、生徒に何かを「伝える」という行為にとても魅力を感じるようになり、この先も「教える」という活動を何らかの形で続けていきたいという目標を持つことができたのもJOIのおかげと、このプログラムに参加できたことにとても感謝しています。

▲ 高校生の書道の作品

JOIコーディネーターとして活動した2年間は私自身の人生においても大きな変化の時期でした。この地に派遣されてから2ヵ月後、まだ新しい環境での活動に慣れない矢先に父が他界。2年目には3/11の東日本大震災が起こり、祖母が他界。そして原子力発電所の近くに住む家族が被災、放射能の影響で、生まれ育った町を失いました。この3/11の東日本大震災の影響で、計画していたコミュニティ内での和太鼓のプログラムも、演奏者が渡米できなくなってしまった関係で、残念ながら中止となってしまいました。しかしながら、災害復興の募金活動やイベント、そしてプレゼンテーションを通して、地域の人々に日本のこと、災害後の現状を知ってもらう機会を提供できたことは良かったと思います。

地震後に立ち上げた災害復興プログラムの中でも、特に力を注いだのが、スーパーバイザーやアーカンソー大学フォートスミス校の多大な協力を得て立ち上げることができた、被災奨学金です。生活そのものを復興するのもままならない中、住む場所を失った学生さんたちには、学業への復帰はどうしても二の次になってしまいます。そのような境遇に置かれた被災地の学生さんに安心して勉強できる環境と機会を与える協力がしたいというフォートスミスの様々な方々の募金や協力、励ましを得て、宮城県から被災された2人の学生さんを受け入れる被災奨学金を設立することができました。

▲学生との募金活動

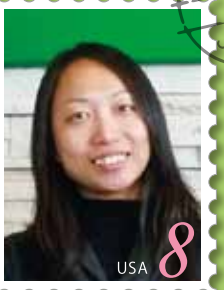
かくいう私自身もこの地震でたくさんのものを失った被災者の一人です。地震の直後はあまりに突然の出来事に、それほどのショックも感じることができず、ただ、家族の生存が確認できたことへの安堵感しかありませんでした。しかし、地震からしばらくたつと、今後自分の家族と自分自身はどうなってしまうんだろうかというとてつもない不安が襲い、訳もなく不安になり涙が止まらなくなることもありました。しかし、たくさんの人からあたたかい励ましの言葉やサポートを受けるうち、そのような励ましに報いることができるよう少しでも災害復興や被災者の方々の力になりたいと強く思うようになりました。地震の際、アメリカにいた私には、実際に日本で地震を経験した被災者の方々がどのようなつらい経験をしたのかは計り知れません。

また、日本国外で何か力になりたいと思ってもできることは限られてしまいます。そのような状況の中、この奨学金を通して2名の学生さんが学業を続けられるようお手伝いできる機会を得たことはとても幸運だったと思います。

このようにJOIの活動を振り返ってみると、活動を通して接した方々からの温かいサポート、様々な面での自分の成長など、プログラムを通して得ることのできた恩恵に報いるだけのものを私もコミュニティに返す事ができたことを祈るばかりです。2年間、貴重な機会を与え、ご支援くださった国際交流基金、ローラシアン協会、アーカンソー大学フォートスミス校、フォートスミスの皆様には、この場をお借りして、心から感謝申し上げます。

▲被災奨学金のための募金活動

日本を伝える意義



第8期
（2009年8月～2011年7月）

吉本 道子
Yoshimoto Michiko

ウェスタン・ミシガン大学
曽我日本センター
Western Michigan University,
The Soga Japan Center
（ミシガン州カラマズー）

学生時代は「国際ワークキャンプ」を通して異文化と多くの人に出会う。大学卒業後は地方公務員として 7 年間勤務し、新たな経験を積みたいと思い JOI に応募。

私はミシガン州にあるウェスタン・ミシガン大学の曽我日本センターに派遣されました。私にとってJOIに参加していた2年間はあっという間だったというよりも、むしろ大きな変動のある2年間だったという感じがしています。

1年目の最初の3ヶ月間は何から始めてよいのだろうという戸惑いと、一緒に派遣された他のコーディネーターに比べて遅れをとっているという焦りがありました。4ヶ月目に高熱を出し一人でベッドに横たわっていた時には「私は一体何をしにアメリカに来たのだろうか」ということをグルグルと考えていたことを覚えています。しかし、冬頃には日本の小学生の作品展示会や日本映画上映会をはじめとする様々なプログラムが無事スタートし、学校のみならず地元の図書館や美術館からもプログラムの依頼が来るようになり、老人ホーム、教会などの様々な場所でも活動を展開していくことができるようになりました。

活動を通して特に印象に残っているのは、自分自身が意図していない角度から現地の人に影響を与えられていると感じられた時です。ガールスカウトのプログラムでは、子ども達に海苔巻きの作り方を教えたり日本の生活様式や日本語の歌を紹介したりしたのですが、プログラムが終わった後に子ども達からだけではなく、子どものお母さんとおばあさんからも素敵な手作りのカードが届き、驚きました。

▲ ガールスカウトの子どもたちと

子どもを対象に日本を伝えていると思っていたのですが、実は周りで見ていた保護者を含めた3世代に渡って私の言葉が伝わっていたのだとわかり、とても嬉しかったです。また、ある図書館では、私のプレゼンテーションが終わった後に若い男性が日本語で話しかけてくれて、彼は「独学で日本語を勉強してきたけれど、初めて本物の日本人に話しかけることができて、そして自分の日本語がちゃんと通じることが分かって本当に嬉しいです」と興奮気味に伝えてくれました。また、ハロウィンのときには仮装をして訪問してきた白人の小さな女の子に「あなたを知ってる!テレビで見た!」と言われて苦笑いしてしまいましたが、その子にとっては私が初めて見る本物のアジア人で、私を見るまではアジア人＝テレビの世界の人でしかなかったようなのです。

▲ 心のこもったサンクスカード

実施したプレゼンテーションの中で一番大変だったのは、地元の美術館から、浮世絵の展示にあわせて「The Art of the Kimono（着物の芸術）」というテーマのプレゼンテーションをしてほしいと依頼された時でした。私自身、着物は渡米する直前に着付け講習で学んだ程度だったので、着物の歴史や浮世絵については一から勉強しなければなりませんでした。緊張して臨んだ当日は予想以上にたくさんの方が聴きに来てくださり、「とても楽しかった!」というコメントやたくさんの質問をいただくことができ、終わった後には心地良い疲労感と大きな達成感を感じることができました。

▲ "The Art of the Kimono"のプレゼンテーション

2011年3月に実施したマンガワークショップは、一番長い時間をかけて実現させたプログラムでした。このプログラムは、漫画家のお二人を日本からお招きして漫画の描き方（ペンとインクの使い方やスクリーントーンの使い方）を教えてもらったワークショップで、国際交流基金ニューヨーク日米センターの助成により実現させることができました。

▲ マンガワークショップで
Mlive.com 3月10日付（http://www.mlive.com）

実施に向けては、航空券の手配や画材の発送依頼、日程調整、謝礼金の支払いと税金の手続き、予算・決算の作成など裏方の事務が主でしたが、慣れない英語での事務手続きには本当に苦労しました。日本だったら1時間でできるような仕事が英語だと2時間も3時間もかかる･･･そんな自分がまるで赤ん坊のように感じられ、早く英語でちゃんと仕事ができるようになりたいと毎日思いましたが、上司のスティーブ・コベル先生の温かいご指導のおかげで、プログラムを無事に成功させることができました。コベル先生は本当に多忙な中、2年間私のことを丁寧に指導してくださり、この先生の下で働くことができた私は本当に幸運だったと思います。

JOIプログラムは派遣先によって環境は異なりますが、プログラムの真髄は一つで、それは「日本に興味を持ってもらい、日本を好きになってもらうこと」だと思います。それを実現させるためには、その媒体はTVでもインターネットでも人でもよいのですが、必ず生きた正しい情報を伝えていくことが必要だと強く感じました。特に現代のアメリカにおいては日本のアニメやマンガやゲーム以外では日本と接する機会がない青少年も多くいるので、それらとは違う別の角度から日本を伝えていくことの重要性が今後高まっていくだろうと私は思っています。

日本を伝えるというアウトリーチ活動自体はその効果が見えにくいのですが、JOIの2年間を終えた今、いかにしてこの活動を継続・拡大させていくことができるのかを考え、その意義と手法について研究しながら、もう一度アメリカで日本を伝える活動をしていきたいと思っています。

つながっていくこと

第8期
(2009年8月～2011年7月)

米倉 夏江
Yonekura Natsue

フィンドレー大学
University of Findlay
(オハイオ州フィンドレー)

大学卒業後、オーストラリアのアデレードに半年間留学。営業の仕事を経て、その後児童英語インストラクターの養成講座に通う。電気会社で勤めていた際に、JOIに出会い、応募を決意。

「やっぱり自分の家って落ち着くなぁ。」2年目に入る前に夏休みをとって一時帰国した時に感じたことです。夏休みが終わりフィンドレーに戻ってきた時、目の前に広がるのどかなトウモロコシ畑を見て、あたたかくて優しい故郷に帰ってきた気がして安心した気持ちになったのを思い出します。JOIの活動を始めて1年、新しいことばかりで必死の毎日を過ごした地は、もうすっかり第二の故郷になっていました。

様々なことがあった2年間、「つながり」をキーワードに特に印象深かったお話を紹介したいと思います。

スーパーバイザーの先生と私が、それぞれ活動弁士、落語家の方々とつながりがあり、それをもとにオハイオ州での活弁・落語口演を開催できればいいですね、と渡米する前から考えていた企画を2年目の秋に、国際交流基金ニューヨーク日米センターから助成金をいただいて実施することになりました。これまで大きなイベントに関わったことがなく、計画・準備と分からないことだらけで手探りでのスタートとなりました。活弁・落語は茶道や生け花と比べるとあまり知られていないので、新しいものを紹介できるというワクワクした気持ちとともに、受け入れてもらえるだろうかといった不安も感じていました。映像や動きを見るとしても、より言葉に頼る文化であるため、日本語に親しみのない人たちがどう感じるのかが心配の種でした。

▲ ステージ上での落語体験

しかし、始まった途端、そんな心配はたくさんの笑顔と笑い声でかき消されました。会場が一体となって小噺(こばなし)のワンシーンの動きをしている姿を見た時、大きな声で一生懸命、国定忠治の名ゼリフ、「赤城の山も今宵を限り～」と演じている姿を見た時、また口演後数ヶ月経って、「今でも家の冷蔵庫にセリフを貼って練習している」と学生が話してくれた時に、全ての不安や苦労が吹き飛びました。

その場にいた人たちが演者の方々と接することで文化を体感する、その場面を目の当たりにした時でした。メインの活動が学校訪問である私は常に自分がプレゼンテーションをする立場で、プレゼンを聞いてくれている人達がどのように反応しているのかを客観的に見ることがあまりありませんでした。しかしこの時、参加してくれた人たちの嬉しそうな表情を見て、人から人へとつながるパワーの大きさを強く感じました。

▲ 活弁のワークショップにて

「うちの学校にも来てほしかった。」見に来てくれていた地域の小学校の先生からの言葉でした。その言葉自体嬉しいものでしたが、さらに嬉しいことに、それが翌年実現することになったのです。JOIコーディネーターとしての活動は終わりましたが、そこでつながったものが先に続いていく結果となったという意味ですごく心に残るものとなりました。

私が特に力を入れて行ったものとして学校訪問があります。2年間を通して、多くの学校で月1度の定期訪問をさせてもらいました。子ども達にとって初めての日本との出会いを作る、との気持ちから大事にしてきた活動です。

その中で出会った一人の女の子の姿を見て、このJOIがどのように人に影響を与え、つながっていくのかが見えたことがありました。定期訪問をしていた小学校の4年生の女の子、クラスではおとなしく目立つタイプではありませんでしたが、そんな彼女が自信を持って他の友達に日本の紹介をしていたところを見る機会がありました。ガールスカウトに参加していた彼女が、あるイベントの東アジアを紹介するブースで仲間の子ども達に折り紙を教え、日本の紹介をしていました。私の授業を飛び出してイキイキと楽しそうに仲間の子ども達に日本の話をする彼女の姿に、私は驚いたのと同時に頼もしくもあり嬉しい気持ちでいっぱいになりました。

▲ ガールスカウトイベントでの日本文化体験ブース

また、彼女のお母さんから、「家でも大人しい子で、あんなに堂々としているところが見れて本当に嬉しかったの。あなたのクラスも楽しんでいて、クラスで作った物はすべてとってあるのよ。」と後で言葉をかけてもらいました。クラスでは見ることのなかった彼女の姿とお母さんの言葉、大切にしてきた学校訪問に対してこれ以上ない自分への励ましになりました。また、このことから、JOIの活動が彼女以外にも同じような影響を与えて、色々なところで少しずつ広がっていっているのではないか、と感じるようになりました。

「つながり」これが2年間JOIコーディネーターとして活動して得たものです。出会ったすべての人とのつながり、フィンドレーという場所とのつながり、また活動をする中で、日本について学び考えるようになり、日本とのつながりも深まったと思います。オハイオの地で、アメリカと日本、人と人とのつながりを築くことができたと思います。そしてこれからは、このつながりが先に広がっていくことを心から願っています。

最後に、素晴らしい機会を与えてくださり、いつも温かく支えてくださった皆さん、本当にどうもありがとうございました。

▲ 小学校訪問

絆「人と人とのつながりが生み出すもの」

第8期
（2009年8月～2011年7月）

森下 佳南
Morishita Kana

ウェブスター大学
Webster University
（ミズーリ州セントルイス）

大学卒業後、名古屋市立守山中学校の英語教員として4年間勤務。ますます進む国際化の流れに適応できる子どもたちの育成に貢献したい。そのために米国の教育現場で国際理解教育に携わりたい。その思いが募り、JOIへの応募を決意する。

2009年の夏、希望とやる気を胸一杯にセントルイスの地に降り立った日のことは今でも忘れません。家族や友人、多くの方々に支えられ、励まされました。予想以上のことを学び、経験させてもらえたこの2年間の活動を振り返りながら印象に残った2年目の出来事や感想をお話しさせていただきます。

1年目同様、2年目の主な活動内容は、(1)地域の小・中・高校での日本に関する授業提供、(2)地域の図書館やその他の公共施設での日本文化に関するワークショップの展開、(3)ウェブスター大学内での日本語・日本文化の促進活動でした。特に2年目は、セントルイスに何かを残したい、ということを意識してこれらの活動に取り組みました。そこで、自分が去った後も少しでも持続可能な活動にするために、新たに挑戦したことを二つ、ご紹介します。

まず、先生向けのワークショップを合計3回開催しました。子どもたちに普段接するのは現場で働いている先生方です。先生自身の日本に対する興味関心の有無で子供たちが学ぶ量や内容が大きく変わります。対象となったのは主に社会科の中学・高校の先生方で、扱う内容は「社会の変化：育児をする男性/働く女性」や「少子高齢化」「日本人女性の役割」「日本の中高生」などでした。

▲教師向けのワークショップ

まだ日本では男尊女卑の流れが強いと思っている先生方がいる中、その流れが変わってきていること、少子化対策の取り組みなどを紹介すると、「なるほど～!」と興味深そうに聞き入ってくれました。ワークショップ後の先生方の感想を読むと「これからは日本にももっと目を向けて授業をしてみるよ」と、前向きな意見が書かれていて、とても嬉しかったです。ワークショップで知り合った先生方からはその後、定期的に訪問授業をさせてもらう機会も得て、よい関係を築くことができました。

次に、地元の大学生や高校生、日本人の方々と協力して学校訪問や図書館での活動も行いました。2010年10月、ある高校の先生から、学校で「日本祭」を一週間行いたいとの依頼を受けました。具体的には、どの授業にも日本をからめた題材を扱ってほしいとのことでした。茶道・華道・書道・お箸の使い方・料理・禅・着付け・アニメ・漫画・ゲームなど、伝統的文化からポップカルチャーまで扱う内容は幅広く、とても一人では成し遂げられないことが確実でした。

▲生け花体験

そこで、1年間築き上げてきた在住日本人とのネットワークを活かし、学べる方からは学び、協力してもらえる方には協力していただきました。大学生からもボランティアを募りました。生け花の先生は当日の都合が悪かったので、高校生でもできる簡単な生け花の生け方を先生自ら私に伝授してくださり、大変助かったのを覚えています。実は、セントルイスには、大小様々ですが、日本人コミュニティが数多くあります。それぞれの分野に誇りを持ち、専門性が高い方もおられ、私も勉強させてもらうことが多々ありました。このようなコミュニティと地域の学校や図書館が一緒に交わりあう機会を何回も設けることで、新しい発見やつながりが生まれることに気付かされました。世代や人種を超えた交流は大きな感動と元気を私たちに与えてくれます。そのことを深く理解させてくれたのが次にあげるもう一つの事例です。

2011年3月11日、東北地方で未曾有の大惨事が起こりました。それ以来、学校や

▲女子高で書道を教える

図書館で出会う子どもたちや大人たちからは必ず、「日本の人たちは大丈夫か。自分たちに何ができるかな」と聞かれます。私の知っている限り、セントルイスでも多くの小・中学や高校、大学で義援金を募る活動が行われました。私が赴任した当初は日本を一国として理解していなかった生徒たちが、今では東日本の復興支援のために大きな声を出して募金箱を抱えている姿を見たときは、何とも言えない気持ちになりました。私の所属していたウェブスター大学でも、日本人学生や教授陣を中心に義援金を集めるため、様々な活動が行われました。

その際、地元のコミュニティの方々が大勢、ボランティアとして参加・協力をしてくださいました。一人ではできないことでも、多くの人々が協力しあうことで計り知れない大きな力が生まれます。
絆が生み出した人のあたたかさとパワーを強く感じた瞬間でした。

私が残せたもの･･･それは結局のところ、目に見えず、はっきりとはわかりません。ただ、自信をもって言えることは、私が去っても、セントルイスには日本が大好きで日本を理解しようとする人々の絆がある、ということなのではないかと思います。

JOIを通して、自分の国や文化に誇りを持ちつつ、世界の様々な国やその文化を尊重することで、より平和で心豊かな社会が生まれると強く感じました。この場をお借りしまして、この貴重な機会を与え、支援してくださった国際交流基金日米センター、ローラシアン協会、ウェブスター大学、セントルイスの皆様には心から感謝申し上げます。

▲東日本大震災チャリティイベント"Hope for Japan"

新しく広がった友達の輪

第9期
(2010年8月～2012年7月)

佐藤 嘉ン奈
Sato Kanna

ミネソタ日米協会
Japan America Society of Minnesota
(ミネソタ州ミネアポリス)

大学卒業後、日本語教師になるために名古屋YWCA日本語教師養成講座を受講。修了後、さらに日本語学を学ぶため、名古屋大学大学院に進み修士号を取得し、JOIプログラムへの参加を決意。プログラム開始まで「とよた日本語学習支援システム」に関わる。

ミネソタ日米協会(以下「JASM」)でのJOIコーディネーターとしての仕事を振り返ると、本当に多くの人に支えられ、助けられ、そして協力してやり遂げた2年間だったと思います。多くのことを経験し達成することができましたが、それもすべて周りの協力があってのことだと思っています。

JASMでは、デスクワーク以外にも、時にはインターン生に指導をし、イベントのコーディネート、FacebookやTwitterを使ったJASMの広報活動、そしてウェブサイトのリニューアルも行いました。オフィス外では毎週土曜日の日本語の会話サークル「Japanese Speaking Club」への参加、ほぼ月1回行っていた「Japanese Cooking Class」の企画立案、そして日本人学生の方々との交流も行いました。そのおかげで、ミネソタ大学学生団体のイベントには、JASM代表として参加し、イベントの宣伝もさせていただきました。

▲ Japanese Cooking Class

これら日々の活動により、今まで以上にミネソタ日米協会という存在を地域の皆さんに知っていただくことができたと思います。特にこれまでJASMの活動が行き届かなかった10代から30代の若年層のアウトリーチ活動を積極的に行ったため、会員の数も2年前よりもずっと増えました。ボランティアが必要となるJASMのイベントには、日本人、アメリカ人に関わらず、多くの若い方々に参加していただき、本当に活気に溢れる活動ができるようになったと実感しています。周りの方々からも「若い人が増えた」「JASMの印象が変わった」という声をたくさんいただきました。

何より、ミネソタに住む方々には「JASMのかんな」として多くの方に私という存在を知っていただき、ミネソタでの日本関係の質問についてたくさんご連絡をいただくようになりました。私もできるだけ地域の方々のリクエストに応えられるよう、ミネソタ内での日本関連の情報を集め、ミネソタに住む日本人や日本に興味のあるアメリカ人、日本関連団体などとつながりをもつように努めました。最初の頃は、現地の人達とのつながりがなく困っていたのですが、今となってはDirectoryのように情報提供窓口としての役割を果たすことができるようになり、本当に2年でこうも変わるものかと驚いています。

そして、何より私がJASMでの活動を通じて忘れられないのは、新しくソーシャルネットワーキングのためのクラブ「かんな倶楽部」を作り、それをJASMの毎月のイベントとして採用してもらえたことです。毎回20人～40人のJASM会員や日本に関心のある人達が日本食レストランに集まり、ゲームなどを通してネットワークを広げる活動を行いました。JETプログラム同窓会にも協力いただき、一緒にイベントのアレンジを行いました。もちろん初めての試みだったので、特に日本食レストランとの価格交渉、狭い店内でのスペースの確保はとても大変でしたが、周りの方の協力をいただき、これまで計10回行うことができました。合計参加人数はほぼ100人になります。JASMとしては今後も同じ名前で続けていく意向があるようで、このイベントに深い関心を持ってくれたことにとても感謝しています。

▲ かんな倶楽部

またJASM以外の活動では、今年の4月に日本人選手が所属していることもあり、ミネソタ唯一のプロサッカーチーム、ミネソタスターズFCの開幕戦を観戦するイベントをコーディネートしました。当日はミネソタ日本語補習校の先生方、父兄の皆さん、そして生徒の方々、Japanese Speaking Clubに参加しているアメリカ人と日本人、元JETプログラム参加者の皆さん、かんな倶楽部のメンバー、そして私がミネソタで知り合った多くの友人が集まり、みんなでミネソタのチームを応援しました。このようにいろいろなグループが一堂に集まったのは、初めての事だったと思います。参加していただいた皆さんからは、「日本語・日本文化という同じ興味をもった人達がたくさんいたのに、これまでみんな別々に行動していた。こうやって一緒に活動することができて嬉しい」というコメントをいただきました。

▲ サッカー観戦

私が関わったイベントに参加してくれた人達のほとんどは、私がミネソタで知り合った日本人やアメリカ人の友人です。今まで出会う機会がなかっただけで、「わたし」というきっかけと「日本」というキーワードだけで多くの日本人、アメリカ人が集まり、最終的には新しいクラブを作ることができました。何より、ミネソタに住む皆さんの賛同があったからこそ、ここまでできたのだと感謝しています。そして、これを機に、イベントを通じて出会った人達が、日本人、アメリカ人の垣根を越えて新しく友達の輪を広げていくお手伝いができ、本当に嬉しく思います。JOIの任期終了後も、ここでの経験を活かし日米の架け橋となる仕事を続けていきたいと思っています。

▲ 学校訪問

Peace. Love. Iowa.

第9期
(2010年8月~2012年7月)

日高 夢
Hidaka Yume

アイオワ大学国際プログラム
The University of Iowa,
International Programs
(アイオワ州アイオワシティ)

大学を卒業後、母校の外国人向け短期研修で日本語インストラクター兼キャンプカウンセラーとしての経験を積む。その後、同大学の国際交流センターに勤務しながら地球市民研究(平和教育)認定証を取得し、JOIへの応募に至る。

帰国を控えた私に先日、同僚が「Peace. Love. Iowa」のロゴが入ったTシャツをプレゼントしてくれました。アメリカに詳しい人でさえもあまり馴染みがないアイオワ州ですが、私にとってはこのロゴの文字どおり、アイオワ州は平和で穏やかな環境の中、愛と温かさに満ちた人々で溢れる素敵な所でした。そんな恵まれた環境で2年間、アウトリーチコーディネーターとして活動するかけがえのない経験をさせていただき、幸せでした。

「もっと多くのアイオワン(アイオワの人)に日本を伝えたい!」という一心で、2年目の活動は1年目にも増して様々な新しいことに挑戦しました。その中でも一番力を注いだのが学校訪問でした。初めの頃は緊張で震えていた声も次第に落ち着き、2年目ともなるとジョークを連発して子ども達の笑いを取れるほどになり、自分自身の成長に驚いています。アイオワ州内のできるだけ多くの市や町を訪れることを常に目標としていたため、時にはアイオワを東西に横断するハイウェイI-80を、日の出を見ながら運転して学校へ向かい、夕日を見ながら帰路に着く日も多々ありました。

特に思い出に残っている経験は、コーン畑に四方を囲まれた田舎の町の小学校を訪れたときのことです。いつものように子ども達に「みんなSushi知っているよね?」と問いかけたところ、クラスのほとんどがポカーンと口を開けて「Sushiって何だ?」という顔を見せてきました。その瞬間、ハッと気づかされたことがありました。海のないアイオワとはいえ、ある程度の規模の町ならスーパーや日本食レストランで寿司を見かける機会もあるため、みんなが知っているものだと思い込んでいたのです。そのとき訪れた町のように片田舎では日本食に触れる機会もないことに気づきました。だから彼らに全く意味のわからない質問を投げかけてしまい、自分の異文化理解への勉強不足を痛感させられました。このような経験をいくつも重ねて多くのことを学びながら、たくさんの教室を訪問しては、いろんな子ども達と"Konnichiwa"を笑顔で交わしてきました。

▲学校訪問で折り紙を紹介

また、東日本大震災が起こった年はすでにこちらで活動を開始していましたので、震災後の1年間は義援金集めのためのイベントを開催したり、学校やシニアセンターなどで震災について話したりする機会も多く与えられました。1年が経過した今年3月には「3.11」の節目の活動に取り組みました。震災で被災した子ども達が世界の人たちへの感謝をこめて描いた絵を、在シカゴ日本国総領事館の広報文化センターから貸していただき、ショックを受けた被災地の子ども達の悲しい思いを一人でも多くのアイオワの人々に伝えようと、市立図書館をはじめ、日本食レストラン、公開ラジオ番組などで紹介することに努めました。

▲公開ラジオで東日本大震災について語る

幸運なことに時期を同じくして、ある非営利団体とアイオワ大学の学生の協力のもと、大学内の映画館を使って、"The Tsunami and The Cherry Blossom"というドキュメンタリー映画の上映も行うことができました。当日は163席が埋まり立ち見が出るほどの盛況で、上映後に参加者から受けた温かいメッセージや、人々が未だに震災への関心を高く持っていることに胸を熱くしました。

今年5月には州都デモインで桜の100周年記念祭が行われました。この100周年記念祭は首都ワシントンD.C.を中心に、日本から贈られた桜の100周年を記念して開催されたもので、その記念イベントの一つとして、デモインに20本の桜の若い木が贈られ、アイオワ州議会議事堂の庭に植樹されました。その桜の植樹を記念して、アイオワ州姉妹都市協会が音頭を取って式典を催したのです。私も着任早々からこの姉妹都市協会の活動にボランティアとして参加してきました。特にアイオワ州と山梨県の交流に深く関わらせていただいた縁もあり、式典の準備、進行に携わることができたことは大きな収穫でした。

2年間の活動だけでは日本への関心をアイオワ州で広めることに目に見える成果が残せたかどうか、確証はありません。それでも出会った人々の心に深く刻まれるような方法で日本の伝統や文化を伝えてきたつもりです。また、活動で使用した資料や教材などはアイオワ大学をはじめ、アイオワ州内で同じくボランティアとして日本文化の紹介に尽力されている方々へ寄贈させていただきました。アイオワ州における日本への関心、興味が今後、ますます広がっていくことを応援し続けて行きたいと思います。そして、デモインに植樹された桜がしっかりと根付き、アイオワの厳しい冬の寒さを乗り越えて生長して、美しい花を開かせる日がくるのも楽しみです。

▲桜寄贈100周年記念イベント

"Peace. Love. Iowa"平和な環境の中でたくさんの愛と友情を授かりました。特に2年間の滞在中、3世帯のアメリカ人家庭にホームステイをし、家族同様の付き合いをしてもらいました。おかげで一日も孤独感を感じることもなく楽しい日々を送ることができました。最後のホームステイ先の子ども達は、「夢がいなくなったら美味しいお味噌汁や餃子が食べられなくなっちゃう!」としきりに嘆いていましたが、心の中では密かにこんな形でもアウトリーチが成功し、日本への興味が芽生えたに違いないと喜んだりもしています。大好きなホストファミリーをはじめ、このような貴重な機会を与えてくださった国際交流基金日米センターとローラシアン協会、アイオワ大学のすべての関係者にこの場を借りて御礼を申し上げます。

▲ホームステイ先の家族と

これからもつながるネットワークの輪

第9期
(2010年8月～2012年7月)

光林 瑠美
Mitsubayashi Rumi

バルパライソ大学
Valparaiso University
(インディアナ州バルパライソ)

大学時代、マルタ共和国、米国カリフォルニア州に留学。国際文化研究を通して異文化交流に興味を持つ。特技の書道を活かして日本文化・伝統などを伝え、両国の異文化理解の架け橋になりたいと思い、JOIに応募する。将来は国際教育の現場に携わり活躍したい。

コーディネーターとして活動した時間は、私の人生の中で大きな意味のある2年間となりました。JOIを通して数え切れない人々と出逢い、日本、日本文化を伝えるために必死で駆け巡ったJOIアウトリーチコーディネーターとしての毎日は、とても楽しく、そこにはいつも人々の笑顔がありました。もちろん、振り返ってみると、楽しいことだけではなく、そこには挑戦すべき課題もたくさんありました。しかし、それを乗り越えることができた今、私が2年間で築き上げた和のネットワークは、これからもどんどん出逢った人たちによって繋がれていくのだと感じています。そして、そのバトンをつくることができ、とても嬉しい気持ちでいっぱいです。

2年目の活動目標は、より多くの学校やコミュニティへ足を運ぶことと、私が去った後も、今まで紹介した様々な日本文化活動を、学校やコミュニティで続けてもらうことでした。バルパライソ大学では、「日本・春祭り」という大きなイベントを開催しました。毎年30人ほどの参加者でしたが、この2年間で、異文化体験ブースをつくり、学生のパフォーマンスを増やしたことで、約150人にゲストが増えて大成功となりました。

▲ バルパライソ大学での「日本・春祭り」

また、図書館、老人ホーム、文化センターなどの施設とのネットワークも広がりました。老人ホーム訪問では、介護士の方と共に日本文化を紹介しながらできるリハビリ計画を担当しました。日本のラジオ体操を紹介したり、手先の運動のために、折り紙や切り絵、お箸の使い方を紹介したり、お年寄りのニーズに合ったアクティビティーを考えることで、それがリハビリにつながり、日本文化を取り入れた面白い企画の一つとなりました。

▲老人ホームでの活動

2年目の活動で最も印象に残っているのは、隣街にある「修行文化センター」の立ち上げのお手伝いです。一度足を運んでみると、そこには何もないただの建物があり、本当にここから文化センターをつくれるのだろうか少し不安になったことを覚えています。しかし、不安よりも好奇心が勝って、「絶対にこの文化センターを盛り上げ、地域の方にもっと日本を感じてもらえる場所にする」という意気込みが強くなりました。看板や内装づくりなどに取り組み、その後、文化クラスやワークショップの計画を立て、月に一度の文化ワークショップと週に一度の書道クラスを担当することになりました。料理、漫画、折り紙、伝統文化教室などの日本文化を紹介できるクラスを設け、書道クラスでは、地域の方々が気軽に楽しく書道ができるようにアットホームな雰囲気にするよう心掛けました。1年前、何もなかったところからスタートした修行文化センターは今では、100人以上が集まる文化センターとして大変盛り上がっています。

▲ 修行文化センターのメンバーと

学校訪問で印象に残っているのは、家庭や学校生活を通して心に傷を抱えている子ども達が行く特別学校への訪問でした。社会福祉士の方と一緒に仕事をする機会があり、特別ゲストとしてその学校へ訪問する依頼がありました。私はいつものように学校訪問へ出かけ、そして、いつものようにプレゼンテーションをしました。プレゼンテーション後、一人の女の子が駆け寄って来てくれ、とても熱心に質問をし、色々と楽しい会話をしたのを覚えています。

▲書道の授業

数ヵ月後、日本語授業のあるクラスを訪れました。いつものようにプレゼンテーションを始めようとした時、教室の前から2番目の席に座っている生徒に気が付きました。それは、数ヶ月前に特別学校で出会った、あの熱心に私に質問してきてくれた女の子でした。彼女はすぐに近づいてきて、数枚の写真を鞄の中から取り出し、その写真を私に見せてくれました。その写真は、特別学校を訪問した時に撮った、私と彼女が浴衣を着ている時の写真です。私が訪問して以来、心の問題を克服する努力をし、普通学校に帰るように頑張ったことを聞きました。そして、今では日本語を勉強し、将来は大学へも進学したいということを私だけに話してくれました。そして、お守りとして2人の写真をいつも鞄に入れてくれていることも話してくれました。私は、胸がいっぱいになりました。アウトリーチを通して人の人生を大きく変える出逢いがあるなんて思ってもいませんでした。アウトリーチを通し、彼女の様に日本文化に興味を示してくれた生徒が数多くいることはとても嬉しく思います。2年間、素晴らしい出逢いと貴重な経験の毎日でした。この2年で築き上げた日本文化理解の和のネットワークがこれからもバルパライソを中心に多くの学校、コミュニティに広がっていくことを願っています。

最後に、このような貴重な体験を与え、2年間温かく見守り、ご支援してくださった国際交流基金日米センター、ローラシアン協会、バルパライソ大学、多くの皆様に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。